

私見 Tuesday 創見

青森の7月は涼しい。なんて素晴らしい土地だ。でもどこか困ったところがある。田舎でエアコンをつけるか、都立でエアコンをつけるか、迷う。暑いのに窓が

らの風だけでやせ我慢するか、無駄にエアコン代を食うかの選択。実に悩ましい。そんな時に思い出すのが、高畑勲監督作品「おもひでぽろぽろ」のワンシーン。

都会育ちの女性が、田舎の風景を見て「自然は素晴らしい」という。それに対し、田舎育ちの青年は「これは自然の風景ではない」と返す。

田舎の風景は、自然と人間の共同作業の結果、できあがったもの。人間が自然の猛威と闘ったり、自然から恵みをもらったりしているうちに、うまくいってきあがってきたもの。自然のちからだけではこの風景はできない。

人間は、住んでいる場所を暮らしやすく変えようとする。時には自然を壊すこともある。それは人間が生まれながらに背負った原罪のようなものだ。しかし、命を守るため、家族の安心のため、背に腹は変えられない。「いめんねと心の中で唱えながら自然に手を

窓を開けるか、エアコンか

し、快適な暮らしを手に入れる。しかし、そこに選択肢が生まれる。自然のちからを借りるのか、それとも自然のちからを借りずに人間のちからだけで生きまわすのか。たとえば、細田守監督作品「マウウォーク」に登場するような日本家庭。

玉樹 真一郎

八戸学院大
地域経営学部特任教授



たまき・しんいちろう
1977年、八戸市生まれ。北
陸先端科学技術大学院大
を卒業。2001年、プリン
シペルに就職後、プラン
ニング業を営む。著書
『ついでに』など。

両戸を開けると縁側が広がる様子は、風を家に招いたり、縁側に食べ物を広げて天日干しするのに都合が良い。自然のちからを借りる、それが田舎の暮らしの本質だ。

一方、最近の家屋は四方を断熱材と壁で、幾重にも取り囲み、エアコンで1年じゅう一定の快適な気候にできる。とても便利な暮らしができるが、自然のちからを借りようとはしていない。これこそが都会の暮らしの本質だ。

そう考えると、青森は田舎と言われているものの、暮らし自体はすっかり都会の暮らしになった。言い換えれば、青森だからといって田舎の暮らしができるとは限らない。逆に、たとえ都会に住んでいても、自然のちからを借りる田舎暮らしはできる。

「君の名は。」「天気の子」等が有名な新海誠監督作品は、たとえ都会的なドラマの中であっても、暮らしの中の自然現象の描写が真骨頂だ。

監督は「思春期の困難な時期に、風景の美しさに救われ、励まされた」と語っている。自然の描写へのこだわりは並大抵ではなく、この世界の美しさを映画に見るわたしたちの心を洗ってくれる。

再び、高畑勲監督作品「かぐや姫の物語」。田舎から都会に出たかぐや姫は、田舎を思い、うたを歌う。冒頭の歌詞を引用する。

鳥 虫 けもの
草 木 花
生き物だけで、美しい詞になっっている。自然のちからを借りながら、自然の中で生きている生き物たちは、それだけで私たちの心をなぐさめる力を持っているようだ。

ありがたいことに、田舎に住んでいると、便利な都会の暮らしから心を引き戻してくる存在に出会うことが多く取りで暮らしてみよう。